
『あの天に届く星』

桜花双嶺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『あの天に届く星』

【Nコード】

N9347I

【作者名】

桜花双嶺

【あらすじ】

星は今も届くと信じていた。

あの天に、あの、広大な天に……………。

自分がどれだけ小さくても、輝き続ければ

必ず届くと……………。

#0 『プロローグ』

彦星と織姫の話。つまり、天の川にまつわる話をご存じだろうか。世間一般で言う七夕伝説のお話で、俺はその話を幼少のころから聞かされていた。

織姫は天帝の娘で、機織の上手な働き者の娘であった。

彦星もまた働き者であり、天帝は二人の結婚を認めたのであった。めでたく夫婦となったが夫婦生活が楽しく、織姫は機を織らなくなり、

彦星は牛を追わなくなったので、天帝は怒り、二人を天の川を隔てて引き離れたが、年に1度、7月7日だけ天帝は会うことを

ゆるし、天の川にどこからかやってきたカササギが橋を架けてくれ会うことができた。なんてお話なのだが…

7月7日に雨が降ると天の川の水かさが増してしまい

（現実で考えれば天気が悪くて空が見えないので）

織姫は渡ることができず彦星も彼女に会うことができないことから催涙雨は織姫と彦星が流す涙とかなんとか言われている。

と、これがその伝説。まあ、つまり簡単に言ってしまうえば恋にうつつをぬかし、本来やるべきことを怠った結果と俺自身の見解ではあるが、そうなんじゃないかと思っている。

けれど、自分は怎なのだろう。

恋。恋愛をせずに高校3年生の春を終えた俺、高嶺一星の春は何もせずに終わってしまった。

彦星と織姫の七夕伝説のような波乱万丈で超遠距離恋愛さままな恋を送りたいと思ったことはないが…。

というかそもそも恋愛に重点を置いたことなど17年間1度としてなかった。

恋愛に目を傾けるときもなかったしいつも俺のそばには、友達と星があつた。

この先もそれでいいじゃないかと……。ずっと思っていた。そう……—

天河音姫に出会うまでは……………

#0 『プロローグ』（後書き）

高嶺一星が起こすひと夏の恋愛。

軽い気持ちで読んでいってください♪

深く考えず、あゝ、恋愛ってこういうのもあるんだな。
程度で見てください

『星天シリーズ』第一幕。

『あの天に届く星』のサブタイトルは

『あなたに届いていますか？ 俺の……………』です。

それでは、完結までどうぞよろしくおねがいします！

#1 『悪友と幼馴染と教室で』

初夏。6月の割には気温が高く、蒸し暑くて気がめいりそうである…。

クラスの皆もそんなのか、廊下側に一斉非難したあと下敷きや教科書、ノートの類で風を送っていたり、何度も汗を拭いたりと…。そんな動作を繰り返していた最中不意に、前の席の悪友がくりとうしろを向き俺を見据えてきた。

「あゝ、あぢい……」

「んなことで話しかけてくるなよ……」。

皆だって、暑いって言うの我慢してんだから」

「そんなこと言ってもねえ……」

窓際最後尾。夏場では最悪な席に座る俺にどうしろというんだ。と、問いかけそうになったが暑いのでやめる。

しかし、本当に暑い……。

「なんで、今日に限って体育休みの自習なんだよ……。ありえねえ

……」

机に突っ伏しながら黒板を見据える悪友、『塚本海里』は黒板にでかでかと書かれている”自習”の文字を睨みつけながら文句を言う。

「本当なら今頃、風通しがいい体育館でバレーだもんなあ……」俺も多少ながらではあるが、文句の一つでも言いたくなる。なんてたって理由が……。

「なんで、体育の先生今日おめでたなんだよ…。」
「生命の誕生に文句言っても仕方ないけどな……。」

こう流すものの、やはり文句は言いたくなる。

あゝ、あづい…。軽く思考が停止しそうになるぞ、この暑さ……。

「そついやあゝさ……。」

「あゝ……。」

「あのさあゝ……。」

「あゝ……。」

「今日暇あゝ……？」

「あゝ……。」

「俺につきあってくんねえ……？」

「あゝ……。」

「合コンに……。」

「あゝ……。」

ああ、もうワケがわからん。暑くて頭がどうにかなりそうだ。

「つて、何か言ったか？」

「よゝし！！！！！！！！聞け、真田！合コンのメンツそろったぞ！！！！！！」

は…？ コイツ、俺以外に話しかけてたっけ？
てか、真田って誰だよ。

「合コン！ お前、了解したよなっ！ なっ！！」

「いや、行かないし…。あと、自習中だからと言って
声量やまわりを考えずに発言するな。」

「だが、お前は了解したよな！ なっ！ なっ！！」

時々俺はコイツと友達をやっているいいものかと思う時がある。
ジト目で悪友を見据えつつ、隣の席を確認してみると
俺と同じご意見のようで……。

「まあ、とりあえず……。隣にいる怖いお姉さんを
なんとかできたら俺は行っても構わないかな……」

俺は”隣の女子”を指さすと面倒くさいとばかりに机に突っ伏す。

「ん？ いいじゃんかよ、琴吹」

「べつつに……。私は関係ないし！」

じゃあ、なぜそんなにお前は不機嫌なんだと……。琴吹と呼ばれる
俺の幼馴染、『琴吹刹那』に問い正したいが
今、この中にはいつてしまえば授業終了まで抜け出せないだろう。
あくまでこのケンカに関しては傍観者という立場の方が面白い。

「琴吹は堅えんだよなあ、恋愛に関して」

「別に海が何をしようと勝手だけど、一星をまきこまないでよ！」

「コイツが１７年間恋愛できないのって、琴吹が堅いからだろ、絶
対……」

「違うわよ！ 一星は１７年間、星が恋人だったのよ！」

「ばか！ 星なんて話もできないし、手もつなげないし、ハグも
チューもその先もできないじゃんかよ！！！！」

「バツ！ そ、そそその先とか言ってるじゃないわよ！！！！」

「あつれ？ 恋愛に関してはお堅いことで有名の刹那さんが
なんでそんなに敏感なのかなあ？？？？？」

「う、うう、うっさいわね！ とにかく、合コンなら海一人で行き
なさいよ！！！！」

「男2人の女3人だったら一人かわいいそうたる!!!」

「というか、大体テストも近いのになにやってんのよ!」

「残念ながら就職組には次のテストは全然まったくもって関係ないね!」

「そういう自分は関係ないって意識がそもそもダメなのよ!」

「そういう刹那さんは同じ大学に行くのに必死だねえ!」

「なっ!!!!!!!」

「……………あれ? 終わったのか? 少しの沈黙があつたので顔をあげると、少しだけ汗をかきながら顔が真っ赤になっている刹那と

暑そうなくせに涼しい顔をしている海里がケンカという火花を散らしていた。

「この勝負もしかして…、海里の勝ち?」

「当たり前だな。俺を口先で負かすにはプロの交渉人を呼ばないと無理だぜ?」

さすが、交渉人を親に持つ男。刹那には部が悪いな。

「そういえば、刹那こそ次のテスト大丈夫か?

確か、この前の診断テスト……………」

「わ、わかってるわよ! でも、その…。勉強は……………」

刹那が明後日の方向を向いているという事はテスト対策はやってない…。

そして、今回も赤点の兆しがあると……………。

「天下無敵の空手部部長さんも、勉強はダメなのか?。
いや! まてよ…、キアラ的にはいいのか?」

「いや、なんでそこ一人で納得してんだお前……。

しょうがないな……。また、勉強会開くか……刹那の”ため”の」

「え？ いいの？」

「その代わり、一星は合コンに連れてくぞ」

「それはもういいって……」

いつの話だ……。って、さっきか。

そもそもどんだけ、海里は合コンに行きたいんだか……。

「お前言ってたじゃん、琴吹をなんとかすれば構わないってさ」

「あ………」

言ったかもしれないな。 うん。

「はあ、わかったよ。その代わり、刹那に勉強教えるの手伝えよ。
文系はお前の方が教えるのうまいんだし……」

「おっけ、おっけ。じゃあ、決まりだな」

「うゝ、ごめんね。一星」

「いって、別に行くだけなら暇つぶしと思えばいいしな。
それより、刹那は次のテストの事考えた方がいいぞ」

「うっ………」

「んじゃあ、合コンは明日な」

「りょーかい……」

話が終わると同時に自習終了のチャイムがなっていた。

気がつけば、暑さは通り過ぎて、教室には風が入ってきていた。

#1 『悪友と幼馴染と教室で』（後書き）

簡単な人物紹介 補足程度。

高嶺 一星 たかみね いっせい

3年C組所属。 この物語の主人公。

塚本 海里 つかもと かいり

3年C組所属。 主人公の悪友。

琴吹 刹那 ことぶき せつな

3年C組所属。 主人公の幼馴染。

以上です。

#2 『悪友と幼馴染の妹と天体観測で』

「あゝ、やっと終わった…」

自習が終わり、担任が数分後に教室にきて今さっきH Rが終わったところだ。

「今日は、なんも用事ないだろ？」

「おー…。どうする？ 今日も天体観測としゃれこみますかい？」

「そうだな。じゃ、いつもの場所集合で。」

今日の夜は天体観測か…。

ここでいう、天体観測ってのは、ただたんに寝転がりながら星を見てあゝでもない、こゝでもないとしやべるだけなのだがそれが今の俺の癒し時間ヒーリングタイムとなっているといっても

過言じゃない。今日は早めに勉強してしまうか。

「今日、朱希ちゃんは連れていくか？」

「ああ、用事がなければな。俺の方から言っておくよ」

「へーい」

その後、海里は用事があるというので先に帰ってしまった。なんでも、『天体観測30時』とかいう本の発売日らしい…。そんなことを考えつつ、2年生のクラスへと足を進める。

「おつ。 朱希奈」

目標の人物を見つけると声をかける。

もう幾度となくきているので2年生のクラスの皆はこちらに無関心だった。

「ん？ 今日も天体観測？」

俺がここに来る理由はそれしかないので最初の言葉はそれだった。

「そそ。忙しい？」

「ん……。今日、天文部はないから大丈夫」

「部長職つてのは大変だね……」

この子は、天文部部長の『琴吹朱希奈』。刹那の妹で

姉と違い、成績優秀。そのくせ、星知識は俺と肩を並べるほどだ。2年生で部長をやっているのも頷けるというもの。

まあ、部員は2年7人。1年8人という少数部活だけど……。

「ん、そんなんでもないけど、中学より本格的だから大変と言えば大変」

「悪かったな、お遊びで」

実を言うと、中学の頃は俺も天文部に所属していた。

あの頃は、俺、海里、朱希奈しかなくてほとんど趣味の範囲、そのものだった。

「別に。星の天文部がお遊びとは思ってないよ。

ただ、観測結果とかそのまとめとか

推測とか推論とか観測行くとたびにまとめるから面倒くさいだけ」

やはり、通常の天文部と中学の頃の天文部は勝手が違う。

そのせいか、本当に面倒くさそうだ……。

「ご苦労なこつて……。んじゃ、今日いつもの場所に集合な」
「おっけー。」

さて、と……。どうやって時間を潰そうか……。このまま帰って勉強してもいいんだけど……。

「あ！ 一星」
「ん？」

手持無沙汰だった俺の前に現れたのは道着姿の刹那だった。

「今、帰り？ それにしても遅いね」

「ああ、朱希奈のところに寄ってきたんだ。

今日、天体観測するから。」

「へえ、またやるんだ」

「刹那も来るか？ 忙しくなければだけど」

「え？ あゝ、うん。行きたいけど……。」

今日は空手部のミー

ティングが

長引きそうだから、また今度行きたいな」

すっかり忘れていたが、刹那は空手部の部長だったよな。

「そっか、試合近いみたいだから頑張れよ」

「う、うん。」

「そんじゃ」

刹那を見送った後、完全に手持無沙汰になってしまった。
しょうがない。家に帰って勉強するか。

カバンを持ち直し、帰路へとつく。

そういえば、今日は月間『スターday』の発売日だったような…。

ん…。。どうすっかなあ…。

そっ、いや、今日の晩飯のおかずは何がいいかなあ…。

卵…があるから、適当に炒飯にでもして食うか…。

いや、でも炒飯は1週間前食べたな…。

どうしたもんか…。

そんなことを考えているうちに家へとつく。

本当、人生無駄な事に試行錯誤すると時間が早く感じるもんだ。

若干17歳の高校生が人生を語っちゃいけないような気がするが…。

と、まあ。そんなこんなで夜になった。

「星」。

玄関から、俺を呼ぶ声があると、支度をし、父さんに一声かけて外へと出た。そこには制服ではなく至福の朱希奈が立っていた。いや、当たり前だけど…。

「今日は、どこみようか…」

「ん、まんべんなく……。…。」
「とうか、本当に星を見てるのか
とうかというのがなあ…」

「たまに、スゴク面白い話して星見なかったときあったね」

「3人して腹かかえて笑ってたんだから空なんて見れねえだろ…」
「ごもつともで」

そして、”いつもの集合場所”にたどり着く。

「おゝ、お二人さん」

「今日は早いな」

「いや、なに。本屋に寄ってからまっすぐ直行したからな」

「飯は？」

「来る途中に済ませた」

そう言っていると、近くのコンビニで買ったと思われる袋を見せてきた。

「あと、これも読んでいた」

高々と少し分厚い本を差し出してきたので
俺と朱希奈はそれをパラパラとめくる。

「どんな本だっけ？」

「『天体観測30時』。超おもしろいんだよ」

「でも、なんで30時なの？」

「それは俺も思った」

俺が疑問に思っていたことを朱希奈が先に言ったのでそれにのる。

「あゝ、これは最後まで読まなきゃわからんな」

「30時っていうと、朝方6時くらいだろ？」

「まあまあ、後で貸すから待ってる」

海里が本をしまつと3人して寝転がり星を見る態勢をとる。
まだ、空は少し明るい方だが、夏は比較的明るく光る星が見えるので大丈夫だ。

「ねえ、星。ぶっちゃけ姉のことどう思ってるの？」
「ん〜？」

夏の大三角であるデネブとアルタイルとベガを探している最中隣から、声が聞こえた。

「だから、姉のことどう思ってるの？」
「姉って、刹那？」

「そう。というか、私に姉は一人しかいないんだけど……」

そりゃ、ごもつとも。俺も知らないしな。

「琴吹はもつと恋愛するべきだよな」

そこに、海里が入ってくる。それは、今日聞いたような気がするな……。

「海さん知っておいてそれってどうよ？」
「あつはつは、知り合ってから6年間何も起きないんだしそろそろ、俺は我慢の限界だな。閉じ込めて無理やり……」
「それ、犯罪。まあ、わからないでもないけど……」

こいつらは一体何の話してるんだまったく……。

「とうの本人が気付かないという…。 前途多難な恋だとは思って
いたけど」

「ここまでとはねえ…」

「それに、こっちもちよつとワケありだしね。」

「恋愛に臆病になるのはわかるよ」

「おい、お前ら何の話してるんだよ」

恋愛関係の話は苦手と言うかそんなしないのでわからないが
さすがにここまで蚊帳の外だとちよつと虫の居所が悪くなる。

「何って……」

「ねえ…?」

「むっ……」

なんだ、お前らのその「察しろよ」みたいな目は……。

「一星くん…。 キミは恋愛に興味がないのかい？」

「や、興味がないわけじゃないけど……。 二の次、三の次って言
うか……」

海里が起き上がり、グイッと俺の前に顔を寄せてきたのでたじろ
ぐ。

「そんなこと言ってから、何年たった？」

「えっと…、4年……かな」

「ダメだね。 星。 ダメすぎ」

隣の朱希奈はもはやため息以上の息をはいている。
なんだよ、二人して……。

「というか、朱希奈だつて恋愛に無関心じゃないのかよ」

「私の周りに、私が興味のある男子がいないのよ。」

それは、私のせいじゃなくまわりのせいでしょ」

とつてつけて、「星と海さんは論外というか恋愛対象外だし…」

なんて、呟きが聞こえたのは俺だけか？

「そうそう、朱希ちゃんは今でも恋愛に関しては鋭いんだぞ？

そうだな、星や琴吹のざつと25倍くらい鋭いな」

なにいつてるんだか……。

刹那はともかく、俺はそんなに鈍くないと思うんだが……。

「星、今、自分そんなに鈍くないと思ったでしょ？」

「な……」

「あまい！ あまいよ！ 一星くん！！！！ そんなことでは
第2の彦星になんかなれないぞ！！！！」

「いや、なりたくねえよ。 てか、彦星って超遠距離恋愛のプロじやねえかよ。」

なんで、俺がそんなのになりたいんだよ……」

「だから、君はチョコラテのように甘いんだ！」

なんか、もう会話がわからなくなってるな。 戻そう。

「で？ 結局、お前らは何の話してたんだ？」

「ダメだよ、海さん……。 ちつともわかってない……」

「うむ、まだまだ超ウルトラ鈍感度は100%のままだな」

何が言いたいんだよ、こいつらは……。

「しょうがない。 お前も明日の合コンで彼女ゲットだ！」

「え、えゝ!? 星、合コンに行くの?」

「いや、なんだよ。 その驚きよう…。 仕方なくだけど」

「あの星ヲタクで、星が大好きで、星マニアで、星がいればいいさゝ。」

の星が合コン!？」

星、星うるせえな…。 しかも、俺をさす星って最後だけだしな…。

「よく、姉が許したね……」

「俺が、負かした口で」

「え? 海さんが接吻したの? 姉と? ええええ……」

「な、なんだね。 朱希ちゃん、その最後のキモチ悪い声は…。」

「だって、姉のファーストが海さんに奪われるんだよ?

最悪じゃん」

今、さりげヒドイこといったな、朱希奈……。

まあ、わからなくもないが……。

親しみやすいものの、海里は女に対して軽いからなあ…。

その点では、実の姉のファーストキスがコイツだとそんな声も出しなくなるだろう。

「まあ、俺がキスしてしまったらお話が兆速で動き出すけどやる?」

「いい。 デメリットが大きすぎる。 というかそんなことしたら

姉の空手でもう二度と目の目を見られなくなっちゃうけど……。

それでもいいの?」

「……………」

きまったように、沈黙する海里。 たぶん、想像しているのだろう。 春の対抗試合を応援しにいった俺たちは知っている。

相手が刹那を挑発して挑発しまくった結果

刹那の回し蹴りをモロにくらい、肋骨にヒビが入ったとのことだ。会話を聞いていた審判のおかげか両成敗と言う事で終わったが

あの光景を見た瞬間、俺たち二人は今後刹那に対する冗談はほどほどに…

なんてのを暗黙の了解としてきた。

「ね？ 海さんならわかるでしょ？」

「は、はははは。この作戦はなかったことに…」

「うん、私も海さんの亡骸を見るのは嫌だからね。」

なかったことにしておくよ」

もしかしたら、海里に対抗できるのは朱希奈しかいないかもしれない。い。

と、このとき再確認した俺である。

てか、俺この二人に口げんかで勝てる気がしないな…。

「星も気を付けなよ。この前、姉が『一星のバカ！』って言いながら

友達からもらった誕生日プレゼントのクッション、グチャグチャにしてたから」

「え…」

「冗談だよ」

その笑顔は信じていいのか否か…。本当に朱希奈にはかなわない。うん、たとえ、天変地異が起きたとしても俺は朱希奈に勝てない。

「朱希奈ちゃん、怖いなあ…」

「ああ、あれは絶対大物になる。お前の両親よりうまい交渉人になるかもな」

「犯人が朱希奈ちゃん見ただけできつと、すぐに籠城解放だろうな」
「ん〜？　なんか言った？」

「「いいえ、何も言ってます」」

コイツ、本当にあの刹那の妹なのだろうか……。

姉と妹のスペックが違いすぎるよ、絶対。

「そろそろ帰る？」

「ん〜、そうだな。」

時刻は11時をさしたところ。

その話を聞いていたのか、海里はごそごそと荷物をまとめ始めていた。

「一星よ……。キサマにこれを貸す」

「なんだ、コレ……」

手渡された本には『合コンでモテる必勝法厳選ベスト10』と書かれていた。

「いや、いらねえよ」

「いや、お前は明日までにこれを読んでおく義務がある。」

「星、読んでおいたほうがいいよ？」

ただでさえ、あの場は空気が鎮まったり空気を乱す奴がいたらダメな社交の場所なんだからね」

「なんで、お前が合コン詳しいんだよ……」

「呼ばれたことあるからね〜……」

恐ろしく、その場の空気とか聞きたくなったが
たぶん、聞かない方がいい。そして、怖くて聞けない……。

まあ、朱希奈のことだ。 社交辞令は得意だから乗り切れたんだろ
うな…。

「まあ、まあ……。 一応」

二人にすすめられ、おずおずと手に取りカバンに入れる。
読んどいた方がいいのかな…。 やっぱ……。

「んじゃ、一星また明日な」

「じゃ、行こうか」

「お、おう……」

そして、微妙な気分の俺を置いてお開きとなった。

……。 帰ったらちよつと読んでみよう…。

#2 『悪友と幼馴染の妹と天体観測で』（後書き）

簡単な人物紹介 p e r t 2 補足程度

こしごびき
琴吹 あきな 朱希奈

2年A組所属。 琴吹刹那の妹。

天文部部長を務める。

簡単な用語紹介

『starday』

月刊雑誌。 毎月12日に発売。 星や天体を題材にしたコラムや

マンガ、トピックスがのつてある。 一星、朱希奈、愛読の1冊。

朱希奈はお金を出すのが面倒なので一星に借りている。

『天体観測30時』

海里愛読の一冊。恋愛ものだが一部ギリギリのネタがある。

タイトルの由来は結ばれた男女が朝方6時まで一緒にいることから。

#3 『悪友と彼女と合コンで』

『1. 空気を読め』

海里から借りた『合コンでモテる必勝法厳選ベスト10』
を開いてみるとイキナリでかかと指南が載っていた。

「（前置きはなしかよ…。）」

と、読者に不親切だなあ。 と思いつつも

ん…。 なんて、アバウトな雑誌なのだろうと初っ端からため息
が出る。

まあ、いいや次。

『2. 相手にすすめられたら例えマズイとわかっていても口に運
ぼう！』

それが男というものだ!!』

「……………」

怒っていいか。 いや、なんとなくこの雑誌ではなく俺の悪友に…。
まあ、いい。

『3. どんな小さな話にも乗ってあげよう！
彼女たちを抱擁できるかどうかで決まるぞ!』

ワケわかんねーよ…。

抱擁って……。

『4・王様ゲームでは場にあつたお題を出そう!』

ん? 下に必勝法が書いてある…。

『?いきなりチューはアホな男。さりげくさりげなく
ボルテージをあげていこう』

『?テンションが上がってきたらお酒を頼もう。
酔った勢いでのお遊びであれば大抵の事は許されるぞ!』

最悪な雑誌だあ……。なんか、もう色々と突っ込みたいところがあるんだけど…。

てか、飲酒を勧めるなよ…。この雑誌の年齢層的に
俺達高校生が見る必要なくね?

『5・連れ出すときはさりげなく。自分から切り出すときは
相手がレディーだということをわきまえて(はあと)』

この、はあととはなんなんだ……。
まあ、なんとなくわからないでもないな。

『6・紳士ならば、女の子がききたいこと、話したいことを察し
先に聞いてあげよう。君の感知能力の偉大さに思わずメモメモ
だ』

最後の方は置いておいて……。
まあ、これもわかるな。

『7・人目につかないところにきたらチャンス！
いけるとこまでイけ！！！！！！』

これだけ、やけに気合がこもってるな……。
って、いけるところってどこまでだよ……。

『8・メアドを聞くときはチャラチャラしたような感じではなく
あくまでクールに！』

まあ、わかるな。

『9・最後は家まで送ってってあげよう。 夜道は……
危険だからねえ……』

なんで、これだけ、意味深なんだよ……。
うん？ 注意書きがある。

『 人目のつかないところであるのなら狼になるのもまたよし』

なんだ、コレ……。
まあいいか。

『10・最後に……、頑張れよ』

最後の方必勝法じゃねえし……。
結局全然わかんねー……。

「明日……。 本当に大丈夫か？ 俺……………」

雑誌を読んだことにより、逆に不安になる俺だった……。

次の日。

「やあ、一星。 どうだった？ その本は」

「や、聞きたいんだけど、この雑誌って年齢層違つくね？」

「ああ、社会人が見るようだからな」

「しらゝつと、言ってんじゃねえよ。 全然役に立たん…」

「んゝ、でもま、読まないよりは良かっただろう？」

・・・。

「あ、ああ……」

とりあえず、YESと答えておくことにする。

こいつも俺のことと思って貸してくれたんだから

貸してもらって、「逆に不安になった」なんて言えるはずないしな。

「じゃあ、今日は大丈夫だな」

「まあ、ひっそりやるよ」

また、いつものように傍観にまわるか。

もちろん、空気を読みつつだが……。

「よし！　いくぜ、一星！」

「はいよ……」

カバンを持ち、席を立つ。　やっと授業が終わった…。

「気を付けなよ、一星。　変な女に騙されちゃだめだからね」

「そういうと…、琴吹にもだまされちゃだめなのか…」

「い、いや！　私にはいいっていうか…。　って！　ち、違うの！

！…！

そ、それに私変な女じゃない！！！！！」

「自己申告は自爆のもとだぞ？」

「うっ……。」

「そんなことより、早く行こうぜ。　真田も待つてるみたいだし……。」

「

俺が指さす先には教室の出口で顔をきらきら輝かせながら

待っているクラスメートの真田がいた。

それに、気づいたのか海里が歩きます。

「そんなことって……。　そんなことって……」

「じゃあ、刹那。　また明日な」

「う、うん。　楽しんできてね」

最後、顔ひきつってたけどどうしたんだアイツ？

「今日、調子悪いのかアイツ？」

「お前にはまだわからんさ……」

…？　まあ、いいか。

そんなこんなで、合コンとなってしまった……。

「いや、お集まりいただきありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ。」

海里と女性陣のリーダーっぽい人が会話していた。
この人たちとか……。

ちなみに席順は右から俺、海里、真田だ。

「じゃあ、まずは自己紹介。俺は塚本海里。」

天川私立百武高校3年生。 趣味は天体観測と読書かな」

うまい具合に海里が自己紹介する。
読書って……。 いや、やめよう。
今日は合コン。 場の空気を読もう。

「俺は、真田流火。 塚本と同じ高校の3年、サッカー部所属。
趣味は……、やっぱりサッカーかな」

真田も、やるなあ……。
というか、どうすっかなあ……。

そんなことを考えていると、真ん中の席に座っている
海里が肘でつついてくる。 あ、俺の番か。

「俺は、高嶺一星といいます。 同じく高校3年生です。
えと、趣味は天体観測です。」

……。 うわ、なんだ海里の目。

さっそく俺しくったか？

「まあ、いいや。じゃあ次は女性陣のかた達どぞ……！」

「アタシは、天川私立水実高校3年、平岸桃香。

趣味はサッカーで、一応サッカー部のマネージャーやってるよ」

そう言うと、平岸さんは真田にウィンクしていた。

真田もまんざらではないみたいだな……。

「私は、天川私立百武高校3年、一縷駕亜美。

テニス部所属で、趣味はもちろん、テニス。好きなものは甘いものだよ」

というか、俺から見て女性陣のレベル高いと思うの俺だけか？

「ほら、次、貴方の番だよ」

「わわ、え、ええっと……。最近天川私立百武高校に転校してきた

天河音姫です。えっと、前は天文部に入っていて、その

ほ、星が好きです！」

突然、先生に授業であてられたみたいに緊張しながらしゃべる女の子。

心なしか、3人の中で一番かわいいと思った。

って、俺、何顔赤くなってるんだ……。

星が好きです。って、俺なわけないだろ……！！！！

冷静になれ、一星。うん、俺はまだ大丈夫だ。

「それじゃ、一通り自己紹介したところで何か食べる？

食べながら話そうぜ」

「あゝ、私この、マドモアゼルプリンが食べたい」

「私は、アイスコーヒー」

と、どんどん注文していく一同。
はあ、俺も何か頼むかな……。

「一星は？」

「あ、俺はコーヒーのブラックで」

「へえ、高嶺くんはブラックのめるんだ」

「え、あ……。一応」

突然、一縷駕さんに話しかけられてさほど会話が広がらない対応を
してしまう。

ヤバイ……。海里の目が怖い……。

こ、ここは……

「そ、その甘いものとか苦手だから」

「ふん……」

あ……。相手の女の子メチャクチャつまらないものを見る目で……
ヤベエ、海里がマジで睨んできた。

はっ！！！！　そうか、確かこの娘自己紹介で甘いものが好きって言
ってたな。

もしかして、もうアウトか！！！！

俺、THE・空気読めない男か！！！！！！

「俺は、甘いもの好きだな。甘いものっていいよな。
一気に疲れ飛んじやうみたいでさ」

「うんうん。わかるわかる。こゝ、じゅわって
疲れ取れちゃうよね」

.....

海里って、すげーなあ……。
なんとなく、変なところで悪友に関心を持ってしまダメ男だった。
はあ……。

「真田君はさあ、ポジションどこなの？」

「あ、俺はFWだよ。今は、夏の大会に向けて練習中」

「へえ、じゃあもしかしてうちとも当たることあるかもね」

「うん。その時はお手柔らかにね」

「あはは。私は試合に出ないけど会った時はヨロシク」

真田もすげーな……。なんだかんだいって俺空気乱してないか……。

目の前の女の子。つまり天河さんを見ると

オロオロして、緊張気味らしい。なんとなく同じような人がいて
くれて

よかったな。って思う反面。男がこんなじゃダメだろ。

という、考えがよぎる。そういえば、星が好きって言ってたな……。

「え、えっと。天河さんって天文部とか入ってたの？」

「え、あ、はい。前の高校で入ってました。」

「じゃあ、今回も入るの？」

「い、いえ……。その、もう3年生なので今から入っても2ヶ月く
らいしか

活動できないから普通に1年過ごすつもりです」

おー！！！！！！ やっと、マトモな会話が成立したぞ！！！！

料理や飲み物が運ばれてきてからも会話は続いた。

その後は天河さんとは会話しなかったけれども

まあ、いいか。無難にやり終えたし……。

「じゃあ、俺は亜美ちゃんに行くかな」

「あ、俺は桃香さんと……」

お前ら、たったの2時間ちよいで下の名前か……。男として、なんかスゴイ敗北感を感じるが……。まあいい。4人ともすぐに出ていってしまった。てことは、必然的に俺がこの娘だな。

「あの！」

「あ、は……はい」

声をかけようと思っていたのだが、先に声をかけられてしまったので少々驚く。というか、立ってみてわかったけどこの娘結構小さいな。俺と頭一個分違うや……。

「その、えっと……」

彼女のを見て脳裏に何かがよぎる。

『6・紳士ならば、女の子がききたいこと、話したいことを察し先に聞いてあげよう。君の感知能力の偉大さに思わずメロメロだ』

こ、これか！……！ 今、これを使うのか！……！

別に、メロメロはいいいけど……！！

「と、とりあえず外でようか」

「はい」

なんつー、誘い方だ。ここで、海里がいたら八つ裂きにされてたな……。

でも、外の風は思いのほか気持ちよかった。
もっと暑いと思ってたのにな……。

そして、頭が冷えたのか肝心なことを忘れていた。

俺がここへ来た意味は別に彼女が欲しいからじゃない。
仕方なく……。 という前置きで来た。

こんな気持ちで恋愛やつちゃ、なんかダメな気がする。
だから……。

「あ、あのさ。 その、ごめん。」

俺、実は友達に人数足りないからって誘われただけで……。

彼女とかは……」

「わ、わたしも！ その、転校してきて試しに合コン行かないって……。

誘われただけで……」

「そっか」

なんだ。 彼女もそうだったのか。

よかった……。 これで怒鳴られでもしたら俺立ち直れない気がするしな。

「あの、貴方も……。 百武高校なんだよね？」

「うん。 でも、見ない顔だから違うクラスだよね」

「はい。 わたしは3年D組です」

「あ、俺はC組。 隣のクラスか」

あれ、なんか自然に話せてる。 なんでだろ……。

「あ、改めましてわたし天河音姫です。」

よろしくね、”いっくん”」

「……………へ？」

い、いつくん？　そ、それって俺の事か？？？？？

「え、いや！　ちが、え〜っと……、ほ、本名は！！！？？」

俺が不思議そうな顔を見ると、天河さんは我に返っていきなり詰め寄ってくる。

「あ、ああ。　高嶺一星」

それに、おずおずと答える。　って、この頃こんなばっかだな。

「そ、そう！　いつくん！」

「……………」

少しの沈黙の中。

さつきとかわんねーだろ……。　ってつつこんじゃ負けなんだろうな。たぶん。

「はわ！　ち、違うの。　いつく、え、いや……」

「い、いや。　いつくんで構わないよ。　そう呼びたいのならきにしないから」

「うう……………」

なんだ、この娘。　ちよつと、おもしろいかも。

「ご、ゴメン……。　へ、変かなあ？」

「いや、面白くていいと思うよ」

「あ、あの。　あなたもわたしの事名前でどーぞ！」
「え？」

い、イキナリ名前!!???

「あ、あれ？ 合コンの時、皆もう、下の名前だったから……。
はわ！ や、やっぱり、変かなあ？」

そんな目で見ないでください……。
それって軽く反則技じゃ……。

「じゃ、じゃあ……。音姫……。さん」

「し、下の名前で呼ぶなら呼び捨てがいいな」
「うっ……」

顔赤らめて何言ってるんだ、この娘。 そんなことしたら……。

「お、音姫。 こ、これでいいかな……？」

「う、うん。 ありがと、いっくん」

男として、やらねばならなくなるだろ、オイ……。
あゝ、でもなんとなくさっきの敗北感はなくなった気がするな。 うん。

だが、なんか、付き合い始めたカップルの空気が漂ってる。
イカン！ これでは、何かがイカン！

「そ、それじゃあ。 夜遅いから送ってくよ。」

「え、あ……い、いいの？」

「うん。 夜道は危険だしね」

「あ、ありがとう！」

って！ 何やってんだ俺——！！！！！！

さらに、状況悪化させてんじゃないかよ！！！！！！

「そ、その。 いったくんは星好き？」

「うん。 好きだよ。 中学の頃は天文部だったからね」

「え？ 高校ではやらないの？」

「……………」

俺が、高校で天文部をやらない理由。

でも、これは……………。

「うん、高校ではやってないかな」

ちよつとした作り笑いで返すことに良心が痛むが
今の俺にはこれしか言えない。

「そつかあ…………。 あ、わたしね、実は天文部の副部長さんだったんだよ」

「へえ…………。 楽しかった？」

「うん！ でも、都会だったから観測にはそんなにいけなかったんだ…………。」

でも、ここなら見晴らしがよさそうだし、ちよつと歩けば観測できそうだね。

それに、昨日夜空を見てたら都会とは違ってとってもきれい！」

純粹無邪気に笑顔ではしゃぎながら星空を見る彼女。

17年間、ここの星空を見てきた俺にとって自分が見てきた空の事をキレイと言ってもらえて新鮮で嬉しい気持ちがいっぱい。

「そうだ。 今度、天体観測をするんだけど君もどうかかな？」

「え…………。 でも、いったくん。 天文部は……………」

「うん。 やってないけど、中学の時の天文部の友達2人と
たまに、天体観測してるんだ。」

「そうなんだ〜！ で、でも…。 わたしが行ってもいいのかな？」

途端に、彼女が心配そうに尋ねてくる。

それに対して俺は笑顔で言った。

「うん、もちろん。 星が好きな人は大歓迎。

と… いつでも、たまに話が脱線したりして星見れなくなるから
天体観測と言うよりも…。 そうだな、星空の下での会話かな…」

「あはは。 でも、おもしろそう！」

「うん、次開催するときは必ず呼ぶよ」

「どうもありがとう、いっくん！」

その後、少し会話をすると彼女の家へといった。
以外に俺の家と近いことがわかる。

「今日は本当にありがとう。 楽しかったよ」

「合コンの席にいた時とはえらい違いだな〜」

「それは、いっくんにも同じことが言えるよ」

「はは、ごもつともで」

「じゃあね、ばいばい」

元氣よく手を振って、彼女は扉の奥へと消えていった。

さて、と…。 俺も帰りますか…。

明かりの少ない道で俺が思ったことは一つだけ…。

もしかしたら、合コンもいいのかもしれない…。

自分の世界観が今日一日で広まったことの新鮮感と
海里に少しの感謝と…。 あとは、音姫に会えたことに…。

たまには、こういう浮いた感じも悪くないと。
帰路につく俺の口元はかすかに緩んでいた。

#3 『悪友と彼女と合コンで』（後書き）

簡単な人物紹介 p e r t 3 補足程度

あまかわ
天河 おとひ 音姫

3年D組所属。 ヒロイン。

ひらぎし
平岸 ももか 桃香

てんかわしりつみなみ
天川私立水実高校の3年生。
サッカー部のマネージャー。

いちるが
一縷駕 あみ 亜美

3年D組所属。 音姫の友達。
テニス部所属。

用語解説 p e r t 2 補足程度

『合コンでモテる必勝法厳選ベスト10』
海里が2年前に買った本。

著者は六車六道で年齢層的に30代くらいの雑誌。
アバウトかつ斬新で一時期話題を呼んだ一冊であったが
あてにならないことが判明し、ブームはすぐに去った。

#4 『俺と幼馴染と俺の家で』

「で？ どうだったのよ」

「は？ え、なにが？」

合コンという難関が終わった次の日。

俺を待っていたのは機嫌が著しくない

空手部部長の幼馴染。 琴吹刹那だった。

「なにつて、合コンよ、合コン。 どうだったの？」

「え……いや………」

俺は昨日のことを思い出す。

まあ、俺的に成功と言えば成功だな。

合コン的には失敗だけど……。

「そ、そその、女の娘と仲良くなったの？」

ん……。 仲良くなったといえば仲良くなったよな。
だから。

「うん。 合コンの席では二人とも緊張しちゃったけど
外に出た時は話しやすくて面白い娘だったよ」

「なっ……！」

「ほぅう、一星もなかなかやるよのお………」

「あ、おはよう。 海里」

いつからいたのかは知らんがカバンを置いて会話に入ってくる海里。

なんだ、お前らのその唾然としたような驚愕したような表情は…
というか、夜といたらそれしかないじゃん……。

「な〜んだ。 母さん、ビックリしちゃって一星をころs…。」

いえ、なんでもないわ」

「お前、今なんて言おうとした？ というか、その口調やめろ」

「あ、昨日、合コンでお会いした！」

「お〜、覚えていてくれたんだね」

「つか、つかもちかいとさん！」

「い、いや、塚本海里だから。 もしかして一星以外眼中になしか

…」

「ん？」

「いや、なんでもないよ」

何やってんだ、海里は……。

最後の方よく聞き取れなかったんだけど…。

はあ…。 ま、いつか。

「改めて、コイツは俺の友達の塚本海里。 で、隣が

幼馴染の、琴吹刹那。 空手部の部長なんだ」

「わ〜、すごいね！ わたしは隣のクラスの天河音姫です。

海里さん先ほどはごめんなさい…。」

「よろしくね、音姫ちゃん。」

「ふ、ふん……」

何を怒ってるんだ刹那は……。

「ほれほれ、琴吹もちやんと挨拶しなきゃ〜」

「わ、わかってるわよ。 琴吹刹那。 よろしく。 天河さん」

「よろしく。 刹那さん」

「・・・」

なんだ、この空気……。海里も微妙に感じ取ってるのか苦笑している。

「あ、そうだ。海里。今度の天体観測、音姫も連れてっていいかな？」

元天文部で星が好きみたいなんだ」

「おゝ！ カワイイ娘なら大歓迎。バッチOK」

「お邪魔じゃないかな？」

「ぜんぜん！」

「私、先教室戻るから……」

……。行ってしまった。

「あ、あの……。わたし、刹那さんを怒らせちゃったのかな？」

「ん、いや。違うでしょ。そうだね、あれは一種の病気かな。」

病気。」

「え？ そうなのか？」

病気なんて俺聞いてないけど……。

「一星にはわかんが女にはいろいろあるんだ。」

おっと、そろそろチャイムになるな」

「あ、じゃあいつくん、海里さん。また今度」

「うん、また今度」

音姫と別れると、海里と共に教室へと入る。席に着くと隣で不機嫌そうな刹那を見る。

「どうしたんだ？ 調子、悪いのか？」
「別に……」

顔を背けたまま仏頂面で頬杖で別にはないだろう。

「まあ、体には気をつけろよ」

それで会話を終わらせ教室に担任が入ってきてHRが始まった。

そして最後の授業中も刹那は不機嫌モードだった。
ほんとどうしたんだろうな……。

「（な、なあ……。海里）」
「（うゝん？）」

小声で前の席の海里に声をかける。

「（なんで、刹那はあんなに機嫌悪いんだ？
いままでの2倍くらい機嫌悪いぞ？）」
「（うゝん…、お前がこの頃付き合い悪いとか？）」
「（ん？ そうか？）」
「（たぶん、空手の部活で忙しいんじゃないか？
休憩がてら誘ってみればいいんじゃない？）」

ふむ、そうだな……。この前、天体観測には来れなかったし
空手部。この頃、忙しそうだな。

「（そうだな。帰りにどこか誘ってみるよ。）」

「（補足だが、ラッキーなことに今日空手部は休みだ。）」
「（おー、サンキュー。）」

さて、放課後誘うところまでは決まったのだがどこに誘えばいいかな
…。
まさか、行くあてもなく誘うのもなあ……。

そして、授業終了のチャイムが鳴る。
HRが終わると、俺は刹那の元へ行った。

「あのさ、今日空手部ないんだろ？
たまにはどこか遊びに行こうぜ？」

「え……。わ、私？」

「いや、刹那以外どこにいるんだ？　って、俺が話しかけてるの
お前しかいないじゃん」

「あ、う、うん。その、いいの？」

なんで、顔赤いんだ？　もしかして、本当に風邪気味とか？

「いいも何も、誘ってんの俺だから。
というか、大丈夫なのか？　体調とかさ」

「あ、全然！　もう、大丈夫だよ！」

ビシッと椅子から立ち上がる刹那。　それを見て体調は大丈夫と
わかる。

「ん〜。具体的にどこ行くか決めてないんだけど……。
どこ行きたい？」

「え……。わ、私はどこでもいいよ。（一星と一緒になら…）」

「ん？ 何か言ったか？」

「い、いや！！！！ 別に！！！！ と、とりあえず学校から出よ！！」

「あ、ああそうだな。」

よかった。 機嫌は直ったみたいだな。

「で、どこ行こうか？」

学校の通学路とも呼べる、この坂『天の坂』を下っている最中
刹那に話しかける。

「え、え〜と…。 一星の家がいいな」

「家？ なんで？」

家って、結構来てないか？

というか、家で遊ぶもんあったかな〜。

「や、別に…。 その、理由は…、ないけどさ」

「ふ〜ん、まあいいや。 じゃあ行くか。」

「へ？ いいの？」

なんで、そこで驚くんだ？

やっぱ、疲れてんのか？

「断る理由はないだろ。 お前が行きたいのであれば…」

それに、今日は刹那を休ませるためなら都合はいいのかもな。
変に遊びに行つて疲れたら本末転倒だし。

「ただいま。」

「お、おじゃまします」

「今更、そんなかたくなるか普通……」

「い、いいの！」

俺は、先に部屋に行ってるように言つと、
台所でお茶の準備をする。確か、あいつ砂糖2つだったな。
あとは、適当にお菓子でも出すか……。

「ほい、コーヒー」

「あ、言ってくれたら私が出すのに」

「一応、客だろ。まあ、刹那にとつちや違和感あると思うけど……」

とにかく！ 今日刹那を休ませる。

それだけが目標。 いわば、優先事項だ。

「あんまり、変わってないね。 一星の部屋」

コーヒーを飲みながら部屋を見渡す刹那にそんなことを言われる・

「いや、1週間前来たなかったっけ？」

「そついうんじゃない、昔から」

「ん、そうか？」

見慣れた部屋を変わらない……。 ん、まあ変わらないかも。
模様替えとか面倒だし、確かに変わってないかもな。

「あゝ、このポスター覚えてる？ 一星が愛読してる
『Sunday』の付録でさ。」

「あゝ、確かその付録ほしかったんだけど受験最中で買う暇なくて
ここらじゃ売ってなくて……」

「そうそう。二人で都心部の方まで行ったよね。」

「しかも、歩いて!!」

「帰ってきたの夜遅かったしな」

その後、親に怒られたのは実は内緒であつたりする。

「そうだ、トランプやろうか」

「ん？ 今更？」

刹那がトランプを俺の机の引き出しから出す。

「やろうよ。久しぶりだもん」

「んゝ、ま……。この頃やってないからいいけど」

ちよつとボロボロのトランプ。

よく4人で遊んだと思う。

しかも、朱希奈や海里がやたらと強くていつもビリ争いは
俺と刹那だった。

「今日は、ビリにはならないからね」

「へいへい」

そんな感じで2時間くらいトランプをしていた時、
7並べの時に手が止まった。

「…刹那？」

刹那の番なのに場にカードが出てこないどころか
声すら聞こえない。

「すー……、すー……」

あれ……。

手にカードもったまま寝るって器用なことすんな、コイツ。
って、そこじゃないな。うん。

とりあえず、カードを置いて……。

布団は……。ええい、面倒くさい。

そのままベッドに寝かすか……。

俺は、起こさないように刹那をゆっくり持ち上げると
ベッドへと寝かせる。

あゝ、制服だけど……。まあ、いいか。

「ん……」

ヤバッ！？ 起きたか？

「ん……。一星」

「え……？」

布団をかぶせようと思った時そんな声が聞こえる。

「の……、バカ……」

「……………」

枕で窒息させてやろうか……。

つて、まあ、いいか。この頃疲れてるらしいから。そっとしておこう。つて、そうなると俺が暇になるよな……。トランプを片づけながらそんなことを思う。

「とりあえず、朱希奈に電話して…」

携帯をカバンから取り出して、電話をかける。

2、3回のコールで主が出た。

『もしもし?』

「あ、朱希奈か? 俺」

『あゝ、星? どうしたの?』

「今、刹那俺のところで寝てるから晩飯食わせて返すわ」

『りよゝかいゝ。まあ、そのお話は次の天体観測の時に聞かせてもらうからゝ』

「あ、わかったわかった。そんじゃな」

電話を切ると、もう一度刹那を見る。

「やっぱ、疲れてるときには上手い飯だよな」

そう思った俺の行動はとても早かった。

まず、スーパーまで自転車をこいで

食材を買ってくると、即行家に帰り、晩御飯を作る。

「おゝ、いい匂いじゃないか」

「あゝ、父さん。お帰り」

そんなこんなで父さんが帰ってくる。
あ、もうこんな時間だ。

「刹那。飯だぞ。刹那」

「ん…、ん？一星？あれ？私…」

「疲れて寝ちゃったんだよ。飯出来てるから食って帰れ」
「ん…」

まだ、夢の中なのか反応が鈍いな。
ま、飯を食べば元気になるか。

「おいしい！」

「だろ？今日は頑張った」

「いつも、こう手の込んだ料理だといいんだがな」
「父さんは黙りなさい」

ん、でも自分が作った料理を他人に食ってもらうってのはいいもんだな。

刹那も笑顔だし、今日のノルマは達成だな。

「今日はどうも」

「ん、気をつけて帰れよ」

「すぐ、隣じゃん…」

「はは、まあまあ。んじゃ、また明日」

「うん、また明日」

帰る刹那を見ると、朝の不機嫌はどこへやら
足取りの軽い刹那を見送った。

#4 『俺と幼馴染と俺の家で』(後書き)

不定期更新が続きます…。はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9347i/>

『あの天に届く星』

2010年10月9日02時58分発行